

2014-12-11

第 26 回縮小社会研究会報告

作成：佐藤国仁（理事）

1. 実施

(1)日時 2014年12月6日（土）13:30～20:00、その後関係者有志で打上会

(2)場所 宮永会館（東京都文京区根津2丁目8-14）（*）

(3)参加 25名くらい（松久様、実数を入れてください）

（*）根津旧宮永町が所有する会館。古い町が自家所有している会館で、近くの方が管理を行い、きれいに維持されている。借用した場所は小さなホールとも呼べる部屋で本格的な舞台のしつらえもあるすごい施設だった。根津映画倶楽部を主宰している島啓一氏の紹介で借用できた。

2. 町歩き

13:30～15:00

前回と同じく山崎範子氏による案内により町歩き。参加者は15名くらい。日暮里駅南口→谷中五重塔→谷中→根津→のこ屋根跡地→と巡って終点は、HAGI-SO ののこ屋根展。ちなみに山崎氏は地域雑誌谷根千の3人のメンバーの一人、谷根千町歩きでは第一人者。

3. 講演会（ベーシックインカム）

演題は「ベーシックインカムってなんだろう？」。演者は平智之氏（前衆議院議員）を予定していたが、急に決まった衆議院総選挙への出馬のため、講演が不可となった。そのため松久会長が代講。

参加者27名。

後半の討論において、ベーシックインカムという仕組みは労働形態の多様性を支えるものであり縮小社会研究においても重要な役割を果たす可能性があることが確認された。

4. 講演会（若い人たち）

5人の若い方々に登壇いただき、彼らの仕事と生き方について発表いただいた。メンバーと内容は次の通り。なお、この研究会でお呼びした若い方々には、なによりも自分の仕事の宣伝、そして、人生の先輩達に求めたいことを遠慮無く伝えていただくことを求めた。

(1)小川正嗣さん（放送大学に学ぶ）

人と人との意思疎通、特に言葉を介する意思疎通と相互理解の問題について、自らの経験を踏まえて語っていただいた。

(2)中川望さん（コガタ社）

動画フィルムは35mm以下を小型と呼称する。小型フィルムを対象に、その保存活動が

ら発展し、損傷したフィルムの清浄化、再生まで手がける。縁の下が落ち着くといわれるのを無理に頼んでの出講でした。

(3)伊藤康彦さん (NOTH 塾経営)

NOTH とは、nothing から派生した造語。研究者、特に自由な立場の研究者に発表の機会を与え、一般の人に対してプレゼンすることで、あたらしい着想を得させ、聴講者も知的興奮を感じるという仕組みを作り、運営している。

(4)柴田大輔さん (写真家)

コロンビアの先住民族の社会に入り、その共同体の写真を撮り続けている。

(以下柴田さんのメッセージ) 50 年に及ぶ国内紛争の中にあるコロンビアでは、紛争終結に向けた大きな動きの中にあります。

反政府ゲリラ・コロンビア革命軍 (FARC) と政府間の和平交渉が 2012 年より続けられ、2014 年 6 月には、再選を果たした現職のサントス大統領が交渉継続を表明しました。

しかしこの間も、紛争の現場である辺境の地では依然戦闘が続き、犠牲となる人々がいます。

近年最も紛争の被害を受けてきた国内南部を歩くと、いたる所に紛争の傷跡があり、今なお戦闘が続いていました。避難民となり故郷を去った人々も多く存在します。ある統計は、これまでに 500 万人以上の国内避難民がでたといいいます。

一方で、その地に残り暮らす人々は、隣合わせの暴力が自分の身に降りかからないよう生きていました。そして、厳しい状況下であっても、少しでも故郷を住み良いいものにしていきたいと願い、日々行動し日常を送っています。

紛争は中央から遠くはなれた場所で続いています。犠牲となるのは辺境に暮らす、顧みられることのなかった人々です。多くの場所では十分な医療、教育、生活環境を整えられずにいます。紛争の原因である富の不均衡は改善されることなく拡大し続けています。

紛争が終わるとして、その後には手を付けられていない豊富な地下資源開発があるのではないかと危惧する人々がいます。開発が始まれば環境は大きく変わり、これまでの生活を続けることができなくなります。紛争地で生きる、最も平和を望む人々の生活は保証されていません。

深い山で人々は、日々繰り返される生活の中に生きています。特別なことは何もありません。平凡に見えるこの日常を送る難しさを、そこで暮らす人たちは知っていました。

ある人が、「私は生まれたこの地で生きていきたい」と話しました。このささやかな願いが当たり前になることができる世界を私は望みつつ、あの優しく暖かな人たちをこれからも追いついていきたいと思えます。

(5)川嶋信子さん (琵琶演奏家)

(以下、川嶋さんのHPから) 役者として数多くの舞台に出演し、CM などでも活躍。その後、日本の音に言いようもなく惹かれる自分に気付き琵琶と出会う。

薩摩琵琶を鶴田流岩佐鶴丈に師事。神社、仏閣での奉納演奏の他、琵琶を身近に感じても

らおうと江戸東京博物館やイベント出演など東京を中心に演奏活動を行っている。
拠点としている町(台東区谷中界隈)を舞台にした演奏会を、と「谷中琵琶 Style」を自ら企画。歴史的建造物や日本画家のアトリエなどを会場に選び、空間を含めた演奏会をプロデュースし『琵琶二人語り』という新たな表現にも挑戦している。
そして川嶋さんには2曲も披露いただき、会場全員を魅了した。

5. 懇親会

同じ会場にて参加者全員で懇親会を開催。若い方にとっては同じ年代の方々との意見交換、そして普段は接する機会の少ない若者と年配者との交流が実現した。

(以上)